

吉屋信子「燃ゆる花」『暴風雨の薔薇』と柳原白蓮、村岡花子

久米 依子

はじめに

吉屋信子の『花物語』は、一九一六（大正五）年七月に『少女画報』で連載が開始され、一九二四（大正一三）年まで同誌に掲載後、最後は一九二五（大正一四）年に『少女倶楽部』に移り一年ほどの連載後、終了している。十年近い連載に、いかに読者に愛好され人気があったかが示されている。そしてこの連載の間に、少女雑誌誌以外にも『花物語』の作品が発表されていたことが近年の研究で判明している。『花物語』の最初の単行本の第二集（洛陽堂、一九二〇「大正九」年二月）所収作品「燃ゆる花」が、既婚女性向け雑誌『婦人界』（東京社、一九二七「大正六」年九月～一九二二「大正一一」年十一月）の一九一九（大正八）年一月から四月に掲載されていたことが分かったのである。『婦人界』の発行元は『花物語』連載中の『少女画報』と同じ東京社であることから、依頼がしやすかったものと思われる。ただし「燃ゆる花」の『婦人界』での目次の表記は「某宗教女学校のロマンス」とあり、『花物語』の一編であるという表示は目次・本文ともになされていない。一応、他誌の連載シリーズの名を避けたかと思われる。

そのように少女雑誌の掲載ではなく、主婦層向け雑誌に掲載され、また内容的にも既婚夫人の家出事件を扱うという、主として少女たち

を主人公とする『花物語』の中では異色作といえる「燃ゆる花」であるが、初出が判明したことにより新たな問題が浮上した。「燃ゆる花」は長らく、一九二二（大正一〇）年一〇月に柳原白蓮が起こしたいわゆる「白蓮事件」をモデルに書かれた作とみなされてきたが、初出が「白蓮事件」以前の一九一九（大正八）年と判明したことから、事件との関連は考え直すべきではないか、という問題提起がなされたのである。

これについて神戸啓多は、掲載誌判明の新調査に基づき、「本作は吉屋が一九二一年の白蓮事件に着想を得たという吉武輝子の記述を先行論はしばしば踏襲してきた」が、「燃ゆる花」は「白蓮事件と切り離して論じられなければならない」（差異が拓く〈聖域〉——吉屋信子『花物語』「燃ゆる花」と「心の花」をめぐって——『関西近代文学』第三号、二〇二四年三月）^①と断定し、山田昭子も「燃ゆる花」の「先行研究において柳原白蓮事件との関連が指摘されていた事実は再考すべきであろう」（吉屋信子——小説の枠を超えて『春風社、二〇二四年七月「第二章」六三ページ）と述べている。

確かに、「燃ゆる花」の『婦人界』掲載はいわゆる「白蓮事件」よりも三年近く早く、この事件をヒントに着想された作とは考えられない。しかし作中の既婚女性のモデルとして、柳原白蓮を排除する必要はないと思われる。「燃ゆる花」が描いたのは、世に名高いわゆる

一九二一年の「白蓮事件」——柳原白蓮が炭鉱王と呼ばれた夫・伊藤伝右衛門への絶縁状を新聞に公開して年下の活動家・宮崎龍介のもとに出奔した事件——ではなく、それ以前の、白蓮の最初の離婚後の動静に基づく作と考えられるからである。作品から「切り離し」（神戸啓多）、「再考すべき」（山田昭子）であるのは、いわゆる一九二一年の「白蓮事件」であつて、白蓮その人がモデルであるという考え方に問題はないと思われる。

一

まず始めに、「燃ゆる花」の梗概を確認しておく。引用は『吉屋信子全集』第一巻（朝日新聞社、一九七五年三月）に拠る。

雪深い北国の都会に、寄宿舎を備えた古いミッシェンスクールがあり、正月二日の吹雪の夜にコートに雪を積もらせて一人の女性が裏門から訪れた。本科四年生の春藤みどりが「細面の美しい顔」のその女性を校主のミス・ワグナーの部屋に案内すると、女性は「あでなる姿」でミス・ワグナーの胸に倒れかかった。

冬休みが終わり、「若い人妻らしい」女性は「ミセス・片岡」と呼ばれ、英文専攻科生となる。ミセスといつても、独立を志す未亡人や、夫の洋行中に専攻科に入る夫人もいるため、級の生徒たちはそれほど驚かなかつたが、その人の「寂しい美しい姿」には驚かされた。みどりは片岡夫人と同室になり、「あわれな馬鹿な飼ひ鳥が籠をぬけ出てこのお部屋へ飛びこんだと思つていっしょに暮らして頂戴な。世界の中で私の魂のやすみ場所は、たった一つ此のお部屋の中ばかりなんです」と言われ、「私——あのお侍女（こしもと）になりますの、美しいお妃（おきさき）の——」と答える。片岡夫人の素性が分からぬまま、やがて校内では夫人の魅

力にみどりが酔わされたとして夫人を「不思議な魔女」と呼び、みどりを「魔女の小さい侍女（じじよ）」と笑う声があがる。しかしみどりは「なんの恐れも恥も感じ」なかつた。

或る日、片岡夫人に面会を求める婦人が訪れ、会うのを嫌がる片岡夫人の代わりにみどりが応対すると、婦人は片岡の「若奥様」は「片岡の長者」と呼ばれる「鉱山王」の令夫人だが、「何十万の財産もお邸もみな振捨ててあの雪の日に、昔生徒でいらつたこの学校へ逃げていらつた」と説明し、夫人を邸へ連れ戻りたいと告げる。みどりはワグナー先生の不在を理由に婦人に帰ってもらうが、後日、無礼な男が現れ、一万円払うから片岡夫人を渡せとワグナー先生に迫る。先生が断ると男は「後悔するなッ」の捨て台詞を吐いて去つた。そしてある明け方、校舎が火事になつたが、助けに入ったワグナー先生に片岡夫人は早く逃げるように言い、「焰は汚れたものを浄化させてくれるでしょう」と言つて部屋の中で一歩も動かず、みどりはその前に膝まづいていた。「二つの影」は「紅蓮（ぐれん）の焰の中に咲く真白き花」として「葩（はな）を散らし」た。

以上が梗概である。「鉱山王」の邸宅から夫人が逃げ出す、という点では、いわゆる「白蓮事件」と同じ設定であるが、「燃ゆる花」の片岡夫人は駆け落ちしたわけではなく、たった一人で母校に逃げ込んでいた。したがつてこの物語は、作品発表時の柳原白蓮の境遇（炭鉱王と呼ばれた伊藤伝右衛門の妻であること）と、以前の白蓮の最初の離婚後の行動（東洋英和女学校に入学）を接合し、婚家から逃げ出した人妻が母校に頼るというストーリーを組み立てたもので、一九二一年の「白蓮事件」が起る前でも着想は可能だったと考えられる。

なお、「燃ゆる花」がいわゆる「白蓮事件」によつて書かれたという情報は、先述の神戸啓多が述べるように、吉武輝子の『女人 吉屋信

子』（一九八二年二月、文藝春秋）の以下の記述に拠るものである。

この〈燃ゆる花〉は、大正十年十月二十二日、「朝日新聞」の社会面を覆いつくすようなかたちで報道された柳原燐子と宮崎龍介の恋愛事件に激しく心を動かされた信子が、その夜、一気に書き上げたものである。（中略）燐子と大正天皇とはいとこにあたる。その女が、名声と富にかこまれた十年間にわたる結婚生活を捨て、宮崎滔天の息子である、七歳年下で、社会主義者の弁護士宮崎龍介のもとに走ったのだから、世紀のスクandalとさわがれたのも無理からぬことであろう。（中略）信子のこの日の日記には、絶縁状の最後の部分を書きうつされている。（中略）片岡ますに殉じて火の中に若きいのちを果てるみどりは、信子の分身であるといつていいだろう。（吉武輝子『女人 吉屋信子』文藝春秋、一九八二年二月「第二章 女人礼賛」一六～一八ページ）

吉屋の日記まで引き合いに出しての記述であるので、信憑性があるようにみえる。しかし「燃ゆる花」は雑誌連載四回にわたり、『花物語』の中では中編といっても良い作品であり、とても一晩で「一気に書き上げた」とは思えない。吉武は実際に吉屋から話を聞いたわけではないらしいので、情報の取り違えも考えられるのではないか。

ここで柳原白蓮の前半生を確認しておきたい。柳原白蓮（一八八五～一九六七）は本名柳原燐子、伯爵であり明治政府の高官を務めた柳原前光（一八五〇～一八九四）を父として一八八五（明治一八）年に生まれた。前光の妹の愛子は大正天皇の生母である。燐子の生母・奥津りょう（二八六七～一八八八）は、外国奉行も務めた旗本の新見正興の娘だが、生後の翌年に父が死去、りょうは奥津家の養女となって柳橋の芸者に

出た。美貌で有名になり、前光に囲われ、一八歳で燐子を生む。燐子は生後間もなく柳原家の養女となるが、生母は三年後、父は燐子が小学生の時に死去。そのころから柳原家の一族である北小路子爵家との縁談が進み、一九〇〇（明治三三）年に一五歳で北小路家の長男資武と結婚、翌年男児を生む。しかし資武と折り合いが悪く、一九〇五年に離婚。離婚後は実家ではば幽閉状態に置かれたが、一九〇八（明治四二）年に東洋英和女学校に入学、寄宿舎に入る。そこから佐佐木信綱家に通って短歌を学び、『心の花』に歌が載るようになる。一九一（明治四四）年に筑豊の炭鉱王として名高い二五歳年上の伊藤伝右衛門（一八六〇～一九四七）と結婚、福岡に移住。「筑紫の女王」と呼ばれ、白蓮の雅号で歌集、戯曲も出版するが、一九二〇（大正九）年一月に宮崎滔天の息子で社会主義活動家の宮崎龍介（一八九二～一九七二）と知り合い、多数の書簡を交わした後、一九二一年一〇月に失踪し、滔天の知人宅に身を寄せる。二二日に伝右衛門宛て絶縁状を新聞紙上に公開。いわゆる「白蓮事件」として世間をにぎわせ、伝右衛門と離婚し、二年を経て何とか宮崎と結ばれるに至るのである。

一九二一年の「白蓮事件」は、華族出身の妻が炭鉱王である夫への絶縁状を新聞に公開し、別の男性のもとへ去るというセンセーショナルな事件としてメディアで大きく取り上げられ、白蓮の名を広く世に知らしめた。事件以前の白蓮も歌人としての知名度はあったが、しかしそれまでの言動が世間に詳細に知られていたようではない。白蓮と伝右衛門の不仲を指摘していた新聞記事としては、一九一八（大正七）年四月の『大阪朝日新聞』掲載の十回シリーズ「筑紫の女王燐子」があるが、そこでも最初の離婚と東洋英和女学校入学については以下のような簡潔な記述にとどまっている。

燐子は北小路を去つて柳原家に帰つてからは麻布の英和女学校に通ひ其の余暇佐佐木信綱博士に就て和歌を学んだ。（筑紫の女王燐子）第三回『大阪朝日新聞』一九一八「大正七」年四月一四日）

なお、同記事は白蓮と伝右衛門との不仲については以下のように記述している。

良人伝右衛門氏に対しては貴族的の本性をあらはに見せて、之を厭ひ避けんとすること甚しけれど、一般に対しては極めて平民的に、又やさしく温和なり（第七回 四月一八日）

さる昵懇の人は、燐子が伝右衛門氏に嫁して七年、後庭の夜を共にするなしと（第八回 四月一九日）

女歌人としての生涯は更に豊かに、更に広い領分を得て行くかも知れぬが人妻としてのあたりまへな不幸は永久に続くだらう。

（第十回「最終回」四月二一日）

「永久に続く」不幸とまで評された夫婦仲が、いずれ破綻することは想像できる。吉屋信子がこの連載記事を知っていたかどうかは定かではないが、白蓮と伝右衛門の不仲は、関係者にとってはある程度認知されていた事実であり、その噂にのつとて「燃ゆる花」は構想されたと考えられる。

なお「燃ゆる花」で片岡夫人に心酔する同室の生徒の名は、白蓮が愛してやまなかった柳原家伝来の人形「みどり丸」と同名の「みどり」である。この「みどり丸」については、白蓮が小説化して『心の花』

一九一八（大正七）年四月号（第三卷第四号）に掲載したこともあつて、「筑紫の女王」でも取り上げられている。小説「みどり丸」では、家の守護とも見なされる人形「緑丸」を世話する「茶知姫」との「人形の恋」が語られ、姫は「みどり様——そまじの外に誰も思ひはせぬ（中略）一生そまじの側を離れはせぬ」と語りかけている。

それにしても「燃ゆる花」では片岡夫人のミッシェンスクールの日々が、持ち込んだ豪華な調度品の細工まで鮮やかに描かれ、何より、燐子を迎え入れた東洋英和女学校の実在の校長ミス・ブラックモアを思わせるミス・ワグナー先生が重要人物として登場するなど、燐子の実際の学園生活を元にしたと思われる描写がさまざまに見出される。このような燐子の学園生活に関する細密な情報を、吉屋はどこから得たのだろうか。それを考えると、これは同じく東洋英和女学校の寄宿生として、燐子の親友になったという村岡花子（一八九三—一九六八）から得た可能性が高いと思われる。

二

白蓮と村岡花子が友情を育てた東洋英和女学校の日々は、近年では村岡花子の評伝である村岡恵理『アンゆりかご』村岡花子の生涯』（マガジンハウス、二〇〇八年六月。以下本稿では『アンゆりかご』と、それに基づくNHKの連続テレビ小説『花子とアン』（二〇一四年上半期）のドラマでよく知られるようになった。しかし先述したように、吉屋が「燃ゆる花」を書いた一九一九年の時点で、燐子の東洋英和女学校の学園生活が世間に周知されていたとは思えない。その状況で「燃ゆる花」を書くにあたっては、事情に精通した人物の助力が必要であり、それが村岡花子だったのではないだろうか。

吉屋と村岡花子の交流は、これまで特に注目されてきてはいないようだ。しかし村岡は、吉屋の『花物語』の連載が始まった一九一六（大正五）年と同時期に、同じ雑誌『少女画報』に童話や翻訳を寄稿していた。これは後述するが、片山廣子の紹介によるという。村岡が結婚前の、まだ安中花子として東洋英和女学校を卒業（一九一三「大正二」年）し、山梨英和女学校の教師をしていたころ（一九一四「大正三」～一九一八「大正七」）のことである。評伝『アンの子りかご』では、山梨英和女学校でのその状況が以下のように記されている。

寄宿舎の女学生にとっては一大事であった。／彼女たちの真ん中には少女向けの文芸雑誌『少女画報』がある。花子がこの雑誌に寄稿している童話とも少女小説ともつかないような物語を、教え子のひとりが発見したのである。／皆、競うようにして読み、花子の周りを取り囲んだ。（中略）執筆者の花子自身が、読者層の憧れるミッシェン・スクールの教師であることは格好の宣伝材料だったらしく、わざわざ学校まで写真を撮りにきたりしたので、教え子たちはますます大喜びして、おかげで花子の机の上にはいつも彼女たちの持つてくる花束が絶えなかった。（『アンの子りかご』第4章 大人も子供も楽しめる本を「一一一～一二二ページ」）

この『少女画報』掲載が仲立ちとなって、吉屋と村岡は知り合ったらしい。『アンの子りかご』には、「吉屋信子とは、お互い20代の初めに雑誌『少女画報』に寄稿していたのが縁の始まりである」（第7章 婦人参政権を求めて「一九六ページ」とある。同じ雑誌でデビューした若い作家同士として親しみ合ったと考えられる。そうであれば「燃ゆる花」の中に、白蓮の学園生活のみならず、村岡花子と関連するような

事項がいくつか書かれていることについても、村岡からの情報提供があったのであろうと納得がいく。

まず「燃ゆる花」の舞台は「雪深い北国の都会」の「ミッシェンスクール」だが、白蓮と村岡が実際に学んだ東洋英和女学校は、ミッシェンスクールではあるが東京麻布の鳥居坂にある。対して「燃ゆる花」発表時に村岡が勤務していたのが、先述の通り東洋英和女学校の姉妹校・山梨英和女学校であり、山梨県甲府市愛宕山（現愛宕町）の、甲府駅からほど近い場所にある。もちろん甲府市の積雪量は「雪深い」というほどではなく、「北国の都会」という説明とは少々ズレるが、甲府が東京より寒冷で雪が多いのは確かである。そのイメージを借りて、片岡夫人の逃避行をよりドラマチックに仕立てるべく、「雪深い北国の都会」の「ミッシェンスクール」を設定したのではないだろうか。

次に、片岡夫人の「片岡」という苗字は、村岡と親しかった作家・翻訳家である片山廣子（一八七八～一九五七）の名を思い起こさせる。村岡は東洋英和女学校在学中に白蓮に誘われて共に佐々木信綱家へ和歌を学びに通い、そこで信綱から片山廣子を紹介され、片山家にも本を借りに行く仲になった。やがて「雑誌『少女画報』に少女小説を書く仕事」を「片山廣子に紹介された」のである。（『アンの子りかご』第4章 大人も子供も楽しめる本を「二〇〇ページ」）。片山廣子は村岡にとって作家・翻訳家への足掛かりを作ってくれた恩人であり、「生涯にわたって交流が続いた」（村岡恵理『花子とアンへの道 本が好き、仕事が好き、ひとが好き』新潮社、二〇一四年三月、四四ページ）。そのゆかりから「片岡」という苗字が選ばれたのではないか。

また『アンの子りかご』には、東洋英和女学校に白蓮が入学する二年前（一九〇六「明治三九」年）に、『不如帰』（一九〇〇「明治三三」年出版）で著名な徳富蘆花の夫人愛子が編入し、三か月ほど寄宿舎で暮ら

し、村岡とも親しくなったと記されている。愛子夫人が編入したのは蘆花の「ご洋行中、英語のお勉強をなさる」（『アンのゆりかご』第3章「腹心の友」の導き）七三ページ）ためだった。この実例は「燃ゆる花」の中で、母校に逃げ込んだ片岡夫人が「英文専攻科」に入った時、それまでも「良人の洋行中に無駄に月日を送らじと心掛けのいい夫人達が、思い立って専攻科へ時折入る」ことがあった、と説明されている事例とぴたり一致する。このような細かな情報は、東洋英和女学校の内部事情に相当詳しくなければ知ることができないものだろう。

以上のように「燃ゆる花」の成立にあたっては、村岡花子からの情報提供が多々あったと考えられる。「某宗教女学校のロマンス」は、架空の空想的な物語ではなく、舞台も登場人物も実在のモデルを元にし、そこに想像的部分を付与して膨らませ、構成された作とみなせよう。

三

吉屋信子の作品と村岡花子に関しては、他にも、吉屋が村岡の経験を参考にして作中に取り入れたのではないかと考えられる小説がある。「燃ゆる花」の二一年後、一九三〇（昭和五）年一月から三一年四月まで『主婦之友』に連載された『暴風雨の薔薇』である。

『暴風雨の薔薇』は、吉屋が一九二八年から門馬千代と共に欧州に一年間滞在し、帰郷する船中で構想した作とされる。吉屋輝子は「暴風雨の薔薇」の成功が、いっしょに信子を、全盛期の高みに押し上げた（吉屋輝子『女人 吉屋信子』第五章 花盛り）二二六ページ）とし、田辺聖子も「女性読者のたちの熱狂を誘わないではいられなかった」作であり、これを契機に吉屋が「売れっ子作家にのしあがる」ことになったと評している（田辺聖子『ゆめはるか 吉屋信子・秋灯机の上の幾山河』

下巻、朝日新聞社、一九九九年九月、七―一四ページ）。吉屋が一躍流行作家になる、その転機となった長編である。

以下に梗概をまとめる。引用は『吉屋信子全集 第三巻』（朝日新聞社、一九七五年七月）に拠る。主人公漣子は東京の女学校で不二子と親友となるが、女学校卒業後、札幌の大きな木材店の娘である不二子は実家に帰りすぐに結婚。漣子は両親が病死して家計が楽ではないため、女子師範に進み、栃木県の県立高女に就職した。その就職先で美術教師の賢二と恋仲になり結婚。二人は東京に移り、賢二は画業に専念、漣子は私立女学校に勤めた。しかし賢二には身勝手な振る舞いがある上に、学生時代に信州の村の娘に子どもを生ませていたことが分かる。漣子はそれもこらえて娘みどりを出産するが、みどりは生後百日に種痘を受けさせた直後、急死した。心労の重なった漣子は休職して十勝平野で農園を営む不二子夫妻の邸宅で保養し、賢二は漣子の夫・守彦の援助を得て絵の修業のため巴里に旅立つ。不二子宅に滞在中、漣子は農村の託児所を提案し守彦と仕事を進めたが、「立派な善良な紳士」である守彦に惹かれ、唇を重ねてしまう。それを不二子の叔母に見られ、不二子にも知られてしまった漣子は泣きながら「信じてください」と不二子に述べ、二人の幸福を祈ると書いた置き手紙を残し、不二子夫婦が追う吹雪の中、列車で去った。

この主人公漣子と村岡花子の経験で共通するのは、実家の経済が苦しい中で女学校に進学し、卒業後女学校の教師を務めたこと、結婚相手にはすでに子どもがいたこと、新婚旅行先が箱根であること、実子の急死、妻ある資産家の男性に惹かれての口づけ、である。ただし後述するが、これが村岡の経験順に書かれているわけではない。

なお「燃ゆる花」との共通点としては、片岡夫人と共に火中で亡くなる同室の学生名は、先述の通り白蓮の愛する人形の名と同じ「みど

り」だが、『暴風雨の薔薇』の濔子の愛児の名もやはり「みどり」である。また現実ではのちに、村岡の妹の梅子の長女が一九三二（昭和七）年に生まれた時、村岡の夫・徹三により「みどり」と命名され、このみどりはやがて村岡の養女となっている（『アンのゆりかご』第7章 夫人参政権を求めて」二〇九ページ）。

ではここで、『暴風雨の薔薇』と相似する村岡花子の経験を、『アンのゆりかご』の記述を中心に改めて追ってみたい。村岡（安中）花子は実家の生活が困窮する中、父の奔走で一九〇三（明治三六）年、十歳で東洋英和女学校に給費生として編入。一九〇八年、編入してきた柳原燐子と親交を結ぶが一九一一年に燐子が再婚する時には反対し、一時絶交している。一九一三年に卒業後、山梨英和女学校に勤務。一九一九（大正八）年に退職し、東京築地の日本基督教興文協会の編集者となり、仕事を介して福音印刷会社の社長の息子で銀座支店を任されていた村岡徹三を知り「激しい恋に落ち」る（『アンのゆりかご』第5章 魂の住み家」一四四ページ）。そして「徹三の胸に抱かれて、初めてくちづけを交わした日」の記念に、自身が翻訳し福音印刷が印刷した冊子の奥付の横に「大正八年五月二十五日 魂の住みみいでし記念すべき日に」と記した。しかし徹三には、三年間の別居中ではあるがすでに子をなした結核療養中の妻がいて、これは「道ならぬ恋」だった。それでも二人はその後七〇通のラブレターを交わし、徹三の離婚が成立して一〇月に結婚。翌年には男児道雄を出産するが難産であり、「この子は私のいのちがけで生んだ子よ」と語っていたという（守屋東「道雄さんの記憶」『道夫を中にして』所収、非売品、一九二六「大正一五」年二月）。一九二二年一月には、失踪事件後の白蓮と一〇年ぶりに再会、友情を確かめ合った。ところが一九二三（大正一二）年の関東大震災で福音印刷は横浜・銀座店ともに倒壊し焼失。横浜では徹三の実弟と共に

に、七〇人の職工が瓦礫の下で亡くなったという^③。その後は役員の裏切りもあり、負債を抱え会社の再興はならなかった。村岡夫婦は自宅にささやかな出版兼印刷社を設立し、村岡は童話集を出すなどするが、一九二六（大正一五）年九月に五歳の長男道雄が疫病で急逝した。発病から三六時間の死であったという。村岡は道雄のために『道雄を中にして』という追悼集（童話集『赤い薔薇』との合本、非売品、一九二六「大正一五」年二月）を編み、そこには白蓮も「道雄様の霊に捧ぐ」として一首の追悼歌を寄せた。悲嘆に打ちのめされた村岡を立ち直らせたのは、片岡廣子からすすめられたマーク・トウェンの『王子と乞食』の翻訳（平凡社、一九二七「昭和二年一〇月」の仕事であったという。この翻訳書には吉屋も「素晴らしいことね」と賞賛の言葉を送った。（『アンのゆりかご』第7章 夫人参政権を求めて」一九八ページ）

村岡のこうした激動の経験はまさに「暴風雨」の日々と呼ぶにふさわしく、その一部が『暴風雨の薔薇』に織り込まれたのではないかと考えられる。ただし村岡の体験は、妻子ある資産家男性との口づけ↓彼との結婚↓子どもの死、という順番をたどったが、小説中では貧しい画家との結婚↓子どもの死↓妻子ある資産家男性との口づけ、と順序を変え、口づけがクライマックスにくるよう設定されている。また主人公濔子も既婚者なので、口づけの相手である守彦とはダブル不倫であり、しかも不倫相手の妻が無二の親友であるという、よりドラマチックな恋に仕立てられている。

子どもの死に関しては、村岡花子の実子は男児であり五歳で死去したが、小説中の女兒は生後間もなくの死という差がある。そのほか、濔子の夫が画家であることは村岡の夫とは大きく異なるので、そうした点には他の知人の体験を参考にした可能性があろう。また濔子の女学校勤務に関する情報は、一九二三（大正一二）年三月の吉屋のポートナーでやはり

女学校教師であった、門馬千代からも得たと考えられる。しかし「道ならぬ恋」(『アンの子りか』)「第5章 魂の住み家」(一四三ページ)となる口づけと子どもの死というショッキングな二つの出来事が、濔子の運命として描かれたのは、やはり村岡花子から知らされた印象的な体験があつてこそその選択ではないかと思われる。なお村岡が息子道雄の生前に「一人の母とその愛児の幸福な生活の産物」(「お母様方へ」として著した童話集の題名は『赤い薔薇』(青蘭社書房、一九二六「大正一五年五月」)であり、その題名も『暴風雨の薔薇』の表題に影響した可能性が考えられる⁽⁴⁾。ただし『暴風雨の薔薇』の濔子は、女学校内で「白薔薇の君」と呼ばれ、皆に慕われていた、という設定になっている。

四

以上確認したように、「燃ゆる花」と『暴風雨の薔薇』には村岡花子からの情報提供という共通点があると考えられる。それではストーリーや人物の関係性などに、共通性はあるだろうか。

まず各編の特徴を考察したい。「燃ゆる花」を『花物語』中の他作品「心の花」と対比的に論じた神戸啓多は、「燃ゆる花」におけるミッシェンスクールは避難所たり得ることはなく、社会から疎外されつつ制度や規範と結託し抱き込まれていこうとする空間⁽⁵⁾であり、それは「システムからの疎外と結託の自家撞着が生成する空間」だと指摘し、対して「心の花」で描かれる修道院の方が、より「制度や規範からの避難所、アジールの空間」であり、「規範の内部に留まりながらそれを相対化し、攪乱し得る」と評価している⁽⁶⁾。

確かに「燃ゆる花」の片岡夫人とみどりは、外部からの放火という暴力を受けて命を落とすのであり、ミッシェンスクールは彼女たちを

守りきれなかったことになる。また片岡夫人は、凝った調度品の数々を寄宿舎に運び込む経済力がありながら、寄宿舎の外へ出て新たな生き方を選ぼうとする意欲はなく、その点では学生のみどりを巻き込んで自滅したようにみえる。しかし二人の死は、女性が思うように生きられず、また女性の精神的な自由を認めようとしない、強固なジェンダー秩序に縛られ、さらに拝金主義にも覆われた社会に対する抗議を示したと考える必要がある。片岡夫人は寄宿舎の部屋でみどりに身をよせて、「いつまでも、そうした純な処女^{おとめ}の気持でいて頂戴」「大人になつては嫌、大人になつてはいけません」と涙ながらにささやいている。成長し大人になれば、金銭欲にまみれた俗世の汚れの中で、女性として抑圧を受けながら生きざるを得ないことを嘆いているのである。

「燃ゆる花」ではその俗世の代表者として、片岡夫人を連れ戻そうとする二人が登場する。最初の婦人は「宝石づくめの櫛を三枚」も束髪にめぐらせ、「高価な服装」で「黄金の腕時計」を巻き「真黒な毛皮の襟巻」を垂らしている。みどりにはその婦人の「肥え過ぎた」姿の「眼も鼻も口も」「愚かな慾望と小さな虚栄」に使われる道具にすぎないように見える。そして婦人は片岡夫人について「御立派なお城のようなお邸」に「何十万という小判のお宝」がうなつてゐるのに、「いったい何が不平なんです」と非難する。次に訪れた「無礼な高慢な」男はミス・ワグナーに、片岡夫人を渡せば「二万円」を出すとして「二万円どうです大したものでしょう」「二万円ですぜ!」と連呼し、やはり金の力を振りかざす。「片岡の長者」の意を受けたこの二人とも、ミッシェンスクールで勉強したいという片岡夫人の気持ちも、「貴方達からお金をいただくならば神様に恥かしい人にならねばなりません」と夫人の「自由」を尊重するミス・ワグナーの「気高い」思いも全く理解できない。社会がこのような人々に動かされるとすれば、ミッ

シヨンスクールの中でミス・ワグナーの「気高い」姿勢に守られている生徒達も、大人になれば寄宿舎を出て、金に左右される世のならいに従い、意に沿わぬ結婚などを強いられることになるだろう。その事態を悲歎する片岡夫人は、たとえ今後「片岡の長者」の追っ手から逃れたとしても、金銭至上主義の俗世で汚れていくだけの生き方しか残されていないと、観念していたと考えられる。信奉者のみどりも道連れにして夫人が死を選ぶさまは、「魔女」と呼ばれるに相応しい恐ろしい末路であったかもしれないが、それだけ夫人の苦悩と絶望は深かったのだと物語は訴える。

これを「燃ゆる花」発表二年半後の、現実の白蓮の出走事件と比較すると、白蓮は絶縁状を敢然と公開して伝右衛門の邸宅から脱出し、片岡夫人のように自滅せずに宮崎龍介との人生を生き直した。しかし考えればそれも、新しい夫となる理解者の男性を得たからこそ、可能であった選択とみなせよう。白蓮一人では邸宅を出て夫に離婚を迫ることは難しかったのではないか。そう考えると、現実世界で男性の援助を得て生き延びていく白蓮と、悲劇に終わる「燃ゆる花」の片岡夫人との差異は、当時の女性が置かれていた困難の多い立場をより強く訴えかける。「燃ゆる花」が、いわゆる白蓮事件よりも前に発想されたという発見は、作品鑑賞の新しい視座を開くものと考えられよう。

次に『暴風雨の薔薇』の滯子の生き方を考えたい。『暴風雨の薔薇』の滯子は、夫の隠し子や愛児の死という度重なる不幸に遭遇して苦しみ、最後には親友とも決別して吹雪の中へ飛び出していく。「燃ゆる花」では、物語の冒頭に片岡夫人が吹雪の中をミッシヨンスクールにたどり着くが、『暴風雨の薔薇』では結末場面、滯子は吹雪の中、不二子の元から旅立つ。自らの恋が招いた結果とはいえ、滯子は資産家の友人に恵まれた庇護を受ける環境から、吹雪の中へ一人で出立し、

その先には茨の道が予想される。しかしそこへ踏み出していく滯子の姿は悲哀に彩られるだけでなく、経験した幾つもの不幸を乗り越え、自分の足で歩みだそうとするたくましさも帯びている。旅立つ列車の窓から滯子は、引き止めようとする不二子と堅く手を握り、また不二子に贈られたツイード地のコートだけは何とか受け取るが、守彦からの高価な銀狐の襟巻きの贈り物は落ちて「フォームの雪の上に粉雪にまぶれた」。これは不二子との友情だけはかろうじて守られていくことの暗示となっている。滯子には自らの勉強で得た教員資格もあり、農園で農村の子ども達のために託児所を計画する実務能力もあり、巴里に離れているとはいえ夫もいる。そこに不二子との絆を信じる心があれば、自力で未来を切り開くことも可能だと物語は示唆している。「燃ゆる花」で外部社会を拒絶し、聖なる場である寄宿舎から動かずに滅びを選んだ片岡夫人とみどりととはまた異なる、滯子の今後が想像される。

このように「燃ゆる花」と『暴風雨の薔薇』を比較すると、物語中で吹雪の場面が効果的に使われたり、「みどり」という名が無垢な者の名前であったりする共通点はあるものの、何よりも主人公の生きる姿勢に変化が見られる。これには村岡をはじめとする、吉屋の周囲の女性たちの生き方による感化もあるだろう。村岡花子は婚家の倒産と愛児の死という悲運をのりこえ、文筆業に邁進し、佐佐木信綱門下の渡辺とめ子主幹の『火の鳥』（一九二八「昭和三年創刊」）同人になったり、自ら『家庭』という雑誌を創刊（一九三〇）したりしている。柳原白蓮は出走事件後、宮崎と家庭を持ち二人の子どもを育てつつ、病気がちな夫を支えてやはり盛んに執筆活動を行っている。⁶⁾「燃ゆる花」に関連した二人の女性はいずれも逆境に負けず、自らの運命を引き受け、村岡が述べるように「起きよ、光を放て」という内心の声に従い、人

生に立ち向かっているのである。濤子の背後には、女性にさまざまな困難を強いる社会の中で、自らの意思をもって生き抜こうとする実在の女性たちの姿がある。その姿を背後に控え、主人公の苦闘とその先の希望を提示する作品を発表し続けたからこそ、吉屋信子は女性読者の広汎な支持を得て、人気作家になっていくのだと思われる。

なお周知のように村岡は、昭和戦前期の子ども向けラジオ番組（一九三二～一九四二）や戦後の『赤毛のアン』の翻訳（一九五二）で大変著名になった。その村岡が一九六八年に亡くなった時、弔辞を読んだのは吉屋信子である。

注記

- (1) 神戸啓多「差異が拓く〈聖域〉——吉屋信子『花物語』『燃ゆる花』と『心の花』をめぐる——」『関西近代文学』三号、二〇二四年三月。
- (2) 『女人 吉屋信子』終章「私の見た人・吉屋信子」の記述によれば、吉武が吉屋に会ったのは東映の宣伝部勤務の昭和三五年、試写会に招待した一度だけであるという。
- (3) この時、瓦礫の中から徹三の弟の時計の鎖だけが見つかったエピソードは、吉屋『空の彼方へ』（一九二八年六月、新潮社）の長姉の銀メダルが震災の焼け跡から見つかる話に生かされた可能性があると思われる。

- (4) 神奈川近代文学館所蔵・吉屋信子文庫の「暴風雨の薔薇」創作ノート」によれば、当初は「秋の薔薇」或いは「女性時代」と題する案もあったようだ。（注1）に同じ。なおこの論ではミッシェンスクールを「制度や規範と結託し抱き込まれていこうとする空間」と意味づけている。しかし「燃ゆる花」作中に記載はないものの、当時ミッシェンスクールは政府の方針による「外国人教師の排斥、キリスト教主義の学校は公認資格を得られないなどの逆境の中」（『アン』のゆりかご）「第2章 英米文学との出会い」（五ページ）にあったが、モデルとなった東洋英和女学校は「政府から再三の圧力が加えられたが、校長に就任したミス・ブラックモアは、文部省の通牒を握りつぶし、徹底したキリスト教教育と英語教育を貫いた」という（村岡恵理『花子とアンへの道 本が好き、仕事が好き、ひとが好き』新潮社、二〇一四年六月、三八ページ）。教育制度を維持する点では「制度や規範」内の組織ではあったが、女子教育を実践するミッシェンスクールに、国家と対峙する面があったということとは留意しておきたい。
- (6) 白蓮の娘・宮崎路夢は「昭和の初め」、「父は結核で臥せっており、母が文筆活動をして家計を支えていた」「随筆とか、小説とか、短歌とか」とインタビューで述べている。（宮崎路夢「特別インタビュー 家族の日々を語る」宮崎路夢監修『柳原白蓮の生涯 愛に生きた歌人』所収、河出書房新社、二〇一五年一月、一〇二ページ）。
- (7) 村岡花子「序」『道雄を中にして』所収、非売品、一九二六（大正一五）年一二月。

（日本大学文理学部特任教授）